

バドミントン上級者との差

宮城県仙台第三高等学校 ー46班

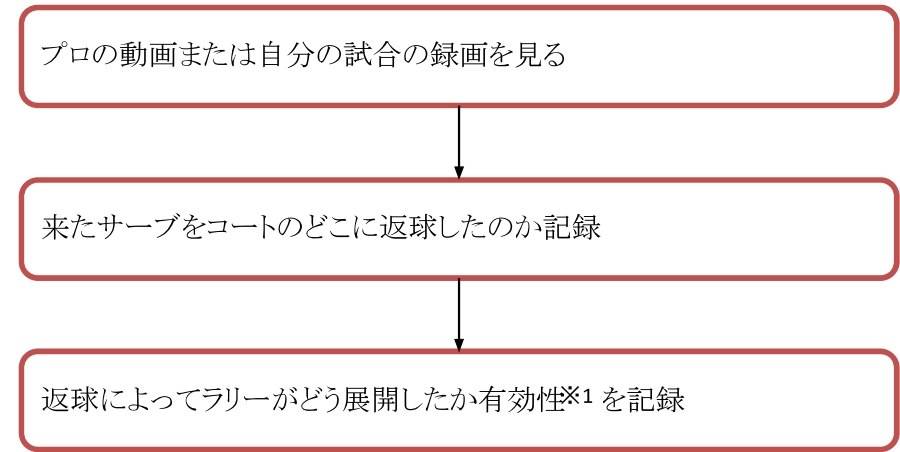
1. 背景と目的

長い間バドミントンを続けてきたが、強いプレイヤーと私とでは、何が違うのかが気になった。探求を通し、強いプレイヤーに通ずる共通点、及び傾向を調査し、私自身のバドミントンの技術向上だけでなく、部活自体のチーム力向上を目的とする。

2. 材料と方法

今回は、相手から打たれたサーブをどこに返球しているのかに着目して研究していく。
サーブに対する返球は、ラリーの最初に行われるために、ラリーがどう展開するかに大きく影響すると考えるため。

i)データの収集方法①



※1 この探求では、有効性の判断においてサーブ後にスマッシュプッシュ等(勢いのあるショット)で打ち返せているかを指標とする。

データの収集方法②

- プロの選手にアンケートを取る。

アンケート内容

- どこに配球することを心がけているか
 - なぜそこに配球するのか

ii)データの集計方法

データは図1のようにコートを9分割し、集計していく。

○配球

{(ある場所に配球された回数)÷(全球数)×100}で割合を出し、図2の例のようにまとめていく。0%は白、1～9%は青色、10～19%は黄色、20～は赤色で示す。

○有効打率

配球とは違い、場所ごとに割合を出す。
{(有効な球数)÷(ある場所に配球された回数)×100}で計算する。0%は白、1～29%は青色、30～59%は黄色、60%～は赤色で示す。

iii)研究方法

主に自分の行った配球とプロの行った配球とで分けてデータを集計し、プロと自分の傾向はどう違うのか、なぜプロはそこを狙うのかについて考察する。考察からどこを狙うのが効果的なのか仮説を立て、それを実践することで検証していく。

まとめ・結論

○まとめ

プロの選手は自分と違い、相手のボディを狙う配球が多いことがわかった。そうすることで、相手に上げさせたり、ミスを減らしたりして自分たちに有利な展開を作っている。また、配球の偏りが少なく、コートのあらゆる場所に返球しているのが分かる。返球の有効性から見てもボディに打つのはとても効果的であるように見える。

○結論

現在の自分とプロの選手との差は、ボディへのショットの活用である。

3. 結果・考察

今回は2015年の全日本総合バドミントン選手権の決勝、保木卓朗/小林優吾ペアと 園田啓悟/ 嘉村健士ペアの動画を上級者のデータとし、令和5年6月の高総体の自分のデータとで比較する。

○結果

プロ選手の傾向として相手プレイヤーのボディ(⑤, ⑧の場所)を重点的に狙っている事がわかる。また、相手プレイヤーのバックハンド側(④)も同様狙っている(図3参照)。ボディへの打球はその後の試合を有効に運ぶ確率が高いことがわかる。また④への配球は多いもののあまり試合を有利に進めることができていない。(図4参照)

自分の傾向として配球の偏りが大きいことが分かる。相手を奥に押しやるような配球が多く見られる(⑦, ⑨)。またバックハンド側(①, ④)へのショットは見られるものの相手のボディないしフォア側には全くショットがないと言える(図5参照)。

また、アンケートの結果(図6参照)からも、上級者のプレイヤーは、ボディを狙うことが多いことがわかる。その理由としてあげられていたのは、「自分がケアレスミスしてしまう確率が低い」「強いショットをボディに打てば、相手から強いショットで返ってこなくなるから」、「相手に上げさせて、次に自分が強いショットを打てるから」であった。

○考察

プロも自分の配球もバックハンドへの狙いが多いのは、バックハンドで打つときに要求される手の動きが、非日常的なもので、慣れていないと打ち返しにくいと言われているため、(参考文献1より)フォア※4へ打つよりも理論上効果的なためだと考えられる。

また、プロと自分との違いとしては、ボディへのショットである。狙う理由として考えられるのは、ボディもバックハンドでシャトルを打つことが多いので、上に同じく打ち返しにくいからだと考えられる。また、バックハンド側以上に、ボディでは腕の可動域が限られるためにより打ちにくく、自分に有利な状況を作りやすいことも要因である。自分からのミスでの失点を抑えやすいこともメリットである。

※2 バックハンド

…プレイヤーの利き手と反対側に来るシャトルを手の甲を前に向打つショット。

※3 ボディ

…プレイヤーの体の付近に来るショット。

※4 フォア側

…プレイヤーの利き手側。

①	② 前	③
4.1%	11.3%	1.0%
④	⑤	⑥
20.6%	14.4%	6.2%
⑦	⑧	⑨
7.2%	30.9%	4.1%

図3 プロ選手4人の配球

①	② 前	③ ※5
50%	72.7%	100%
④	⑤	⑥
55.5%	78.6%	50%
⑦	⑧	⑨
28.6%	63.3%	50%

図4 プロ選手4人の有効打率

①	②前	③
5.7%	0%	0%
④	⑤	⑥
8.6%	0%	0%
⑦	⑧	⑨
54.3%	5.7%	25.7%

図5 自分の配球

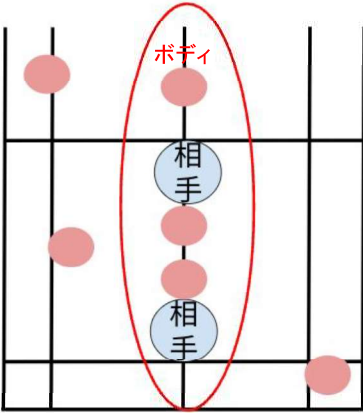


図6 実業団の選手 6人にとったアンケート結果

参考文献

- バドミントンのバックハンド・ストロークに関する一考察
- 保木卓朗/小林優吾 Vs 園田啓悟/ 嘉村健士 | バドミントン日本 <https://youtu.be/dwsJTd2AFD8?feature=shared>